

言語教育データベース研究会

日時： 2009年8月20日（木）13時30分～16時30分

場所： 国立国語研究所 2階 多目的室 （東京都立川市みどり町10-2）

講師： 見城慶和 氏 （元夜間中学校専任教諭・現自主勉強会「えんぴつの会」スタッフ）
関本保孝 氏 （墨田区立文花中学校夜間学級教諭）

13時30分～40分 趣旨説明（野山）

- ・ 実際のところ会話力だけでは生活できないので、漢字の勉強の大切さというものを考えた
- ・ データベースの資料としてこれを公開していきたい。
- ・ 夜間中学の学習者と、日本語の識字の問題を総合的に考えたい。

13時40分～14時40分「生活基本漢字（381字）ができるまでと、その活用方法」（見城）

- ・ 2003年よりえんぴつの会を立ち上げた。夜間中学に49年間勤めた経験を踏まえ、その当時の卒業生などにも協力をしてもらって運営をしている。
- ・ 生徒たちがどのような学習を必要としているのかを考えた。その経緯として、「国語能力判定テスト」を作るなど、国語において「生きる力」を具体化していこうとした。配布資料の「4つの目標」などを参照。
- ・ 生徒の中には、住所や名前すらも書けないような人もいた。よって、基礎的教育内容として、これらの字を速く書く練習をしたり、五十音順でなくランダムに書けるようにする練習を行ったりした。いわゆる、手首化、肉体化、条件反射化をさせた。
- ・ 読ませる文章は、2分ぐらいで読めるような短めのものにした。2000年までに20冊ほどの国語の自主教材を開発する。
- ・ 「ペンだこで勝負」などの言葉で生徒を励ました。書きなれノートを作らせたり、文化祭で力を発揮させたり、生活基本漢字を習得した人には部首と音符を学ばせたり（漢字の積み木的、網目的な面白さ）、ア段を口を大きく開けて発音する練習をさせたりなど、「目で読んで体で感じて声に出す」姿勢で学ばせた。
- ・ 生徒たちは、1970年代以降名前や住所が書けなかったり、障害児学級から進学してきたりする人も増えてきた。国籍も年齢も多様であり、仕事に就いている人も多いので、通常の学年配当漢字は生徒たちのニーズに合わなかった。
- ・ 漢字の精選の柱については、配布資料の3ページ右下参照。駅名や郵便局や回覧板などあ

らゆる日常生活に触れると思われるものから、2年間かけて絞り込んだ。

- 当初は800字程度まで絞れたが、それも多しと思ひ、さらに最低ラインまで絞っていった。
- 絞り込んだ漢字を、配布資料5ページにあるように文章にし、それをすらすら読めるまで練習し、また、書写を行なった。また、進度表を作り、学習の方向付けを明確にした。
- 非漢字圏の生徒はさらに「はじめてのかんじ」として100字程度まで絞った（8ページ参照）。

- 夜間中学ではどんな悩みを抱えた生徒がいたか。例えば、東北から来た人で、貧乏で小学校すら行けず字が読めない人がいた。「あなたは馬鹿だったのではなく学べなかつただけ、勉強をすればできるようになる」と言われ頑張れた、という体験談を残している。「無学で働くことはどんなに辛いことか。夜間中学は私を生まれ変わらせてくれた。」
- 私は夜間中学生である、というアイデンティティを持てる。漢字や概念や掛け算等々全てを学び救われた、親を否定すべきではないということも学んだ、という。いわば、「私は目が見えるようになった」という気持である。
- 文字の習得に意欲を持つことで、生きる自信を取り戻し、その人らしい人生を取り戻す学びである。当たり前のように勉強してきた人にはわからないけれど、実はそれが喜びなのである。
- こういった生徒を感じる喜びは、教えている教員側にも返ってくるものである。
- 本当にその人にとって必要な学びとは何か、それにこたえるやり方が大切である。常用漢字では1900以上の漢字を学ばせるが、それを彼らに覚えさせることは、漢字嫌い→国語嫌い→勉強嫌いにさせぬためにも、Noである。子どもを苦しめるのが漢字教育なのではない。
- 実際、生活基本漢字381字は、現代の新聞で使われる漢字ベスト100字中、94字が重なる。なお、残りの生活基本漢字に入らない6字は、「戦、機、連、対、回、現」である。

- 従来型の品詞文法は、古典解釈や外国語学習に役立つものである。一方、「文法は判断の法則」として考えていきたい。名詞文、動詞文、形容詞文を柱にして考えたい。
- 例えば、名詞文であれば、上位概念を持つてくると否定判断につながるの、なるべく判断は具体的なものにして導入する。抽象度の会話はゆっくり上げるようにする。
- 動詞文であれば、他動詞や可能動詞を大切にす。自動詞は、「イラクで戦争がおこる」「便所が汚れている」など傍観者のためである。他動詞は「トイレを汚した」など、自らを主体者として社会を見られる。可能動詞は「字が書けない」「泳げない」など否定的にならないようにする。
- 形容詞文では、「黒い」「白い」などの属性判断と、「～しい」に代表される感情や価値・評価の形容詞の違いをしっかりと認識する。例えば、A君に対する判断を「明るいA君」「うるさいA君」などと判断する際に、生徒の考え方が現れる。

1 4時45分～15時45分「夜間中学における日本語（の）教育の現状について」（関本）

- もともとは史学科出身である。78年当時は中国帰国者の生徒がほとんどであったが、90年代から多国籍になっていった。
- 夜間中学は学習指導要領がそのまま適用できない場である。
- 日本語を母語とする人は文字を核に勉強するが、日本語を新しい言葉として学ぶ人たちにとっては、日本文化を漢字を含めて受け入れていく異文化適応が大きなウェイトを占めている。
- 90年代の日本語教材は不完全であると判断し、自主教材を作ってきた。これには、生活の指導や、生徒たちの就職の世話までを考えたものである。
- 中国語を学ぶことにより、中国の人がよく間違える日本語表現がわかってきた。「電気をあけてください」「窓を消してください」、また、「に」と「で」の違い、「給」と「あげる、くれる、もらう」との違いなど、国語文法で詳しく扱われない部分である。
- また、日中の習慣の違いによるトラブルや、日本の地震、ゴミの出し方、住宅事情による自転車事故、保険、冠婚葬祭、食事、都道府県、憲法など、職安の人などの専門の人の力を借りて、教材を作っていた。
- 国際人権規約などに触れ、外国人でも教育を受けられること、裁判の時に通訳をつける権利があることなどを確認した。
- 非識字の中高年の人もいる中で、学歴によって文法理解などに差があるが、そこでは、①正確さを求めない、②文法にこだわらない、③教室の枠を超える、ことが大事である。
- 生活日本語として、生徒には、教材にある模範解答を答えさせるのではなく、自分の事情に照らし合わせて答えてもらう（ゴミを出す曜日など）。また、役所への電話方法などにも触れる。日本語学習に教科学習を取り入れる（世界地図）。
- 公開授業や、校長先生を相手にするなど、実際に外で話せるようになるように、「緊張」の練習をしていく。「失礼します」など、たった1つ言葉や行動ができるだけで好感が持たれる。
- ゲストティーチャーとして、生徒の文化を昼間学校で話してもらうなどの試みも行なった。

15時45分～16時00分 休憩

16時00分～30分 質疑応答および協議

（関本氏）

- 教材は、基本的にコピー可能にしてある。
- 中国の方の子どもの呼び寄せは、半年あれば日本語を覚えられるという楽観があり、さらに、中国人だから漢字は大丈夫という自尊心もある。国際再婚、料理屋の子どもなどをはじめ、どこの夜間学校も最近では10代が増えている。

- ・ 英語多読が流行っているように、日本語多読にも関係する。
- ・ 従来の小学校の教科書は、「春だ、みんなで走り出そう」などの文があるが、こういう文が実は外国人にとってとても難しい。
- ・ 東北地方その他には夜間学校があまりなく、そのために東京に出てくる場合も多い。
- ・ 高学歴社会である日本だからこそ、これに漏れた人たちが苦勞する現実がある。例えば仮に識字率が50%程度なら、役所に代筆器なども置いてあるだろうに。
- ・ 日本は海外への教育ODAなどは力を入れる一方で、国内は不十分である。子どもの権利条約，日弁連への申立ての話。

(見城氏)

- ・ 「赤字になったら大変だ」，「青い顔になる」など，作成者が自由に作っている。
- ・ 基本語彙を学び終えたら，平等，権利，義務，貧乏，など，論理や思考や認識的な言葉を教える。その語句を知らないとちゃんと生きられないような語彙や，仲間意識を育てる語彙などを教える。
- ・ 作品をテーマごとに集めて生徒に考えてもらう。次に何を読むとよいか紹介する。
- ・ 人生をいかに生きるかの文学作品として，詩を紹介している。1つの作品で勝負するのではなく作品群として提示することで，自然，家族，戦争などの分野について考えてもらう。
- ・ また，それをもとに，感想文を書かせ，実際に作詩に挑戦してみる。すると，宮沢賢治の書き方を参考にして運動会の作文を書いてきた生徒がいた。文学の読みは一人ひとり違うので，これがどう人生に関わるかを考える良い機会である。
- ・ 識字教育，リテラシー，文化的な教育を大切にしている。